



水芭蕉庵小文庫 上

中村俊定文庫
文庫 18
130
1





芭蕉庵小文庫

木曾乃情多や生如く春草
かすたれり言の葉れじ如く
として、か老塚一塚とけり
く風雅とは惠日良のちり
乃くしんぬらふとじし
ゆり身庵らるる名溪寺の禪師



文庫

冬亡師とて落じ川日く流るる
きれく例乃杉風々志さよむの
志塚と伝きてしゆふ宗祇乃や
とうとう如し書りしんらう一命と壺
中一一納め此塚のわらう一物如や
ちよこくくしゆふ志とあきさく
情しとくくひ白とやあか猶師の恩
と志らふしゆふは霜落紫うこ

乃きくくこのしゆふ石料とく
霜くれ志芭蕉とやあか後白塚
や杉子う如き記せりしゆふ愁
腸りげわらうしゆふく

史邦

日志影の如く寒く後白塚

史邦

小文庫

久々之部

嶋田志宿一りて

宿一りて名も知らぬ時雨

とて

旅宿

くし時雨戸の扉をくればタンホ及歩也 山店

采河岸でくくや種馬の河内 嵐作

雷の川が松をくればの袖一くれ 大尊

食とふふくし河内村のくれば 去來

板壁や馬の寐をくれば小夜をく 史邦

雑々

冬空やとくをくれば江戸のくれば 嵐作

ほくほくやとくをくれば九月 史邦

城山一雉子あつ小六月 山店

まこと穂小千鳥啼くくれば 史邦

まこと菊小野武士を住らば堅田 全

惠比須誦のむねを鴨小成おろり 利合
まへ 朝し 葉と立ろり 魚比と海 史邦
玉わもも百人前せ、かろりこー 山店
御取越内依まゝ客ご一ご次 嵐竹
槽物成ともるおあもせろろ、かろりに 養浩
おやつとあーまへたた松の坊 史邦
むろろは小馴て能麻ふお物下 惟然
お話くくも虫もしけはくお夜哉 種文

霜股の麻さろくや鴨のじま 大阜

ゆふよせと悲いて

糸のほりトこ 暖火火桶お 大志

火燧ろろ麻の比お 雲 雲芝

正秀亭 當座

草羽織とろくされて火燧お 史邦

用ろりさろりこ 奴柳 大阜

あー 葎おろり小家小 残香

風之志一物心也一蘭
冬川や木乃葉冬黒く蒼白
唯然
心極一入心入生海氣
梨雪
馬鴨や一入心入生海氣
蘇人
乞衣一入心入生海氣
足日
雞乃斤脚行や物中一入心入
文章
令屏老松も物心入生海氣
芭蕉
小屏風一入心入生海氣
斜嶺

旅者

大名の森間一物心也一蘭
許六
猫も食下一入心入生海氣
山店
夜神樂又衝を喰ふ物心入生海氣
史邦
菜も食下一入心入生海氣
支老
留主のやふ物心入生海氣
芭蕉
甲と干ふ物心入生海氣
史邦
子祭や梅も物心入生海氣
山店

子繁一貫はかた自惚汁史邦
餅密棋吹草も引もはく九下風
幽美一水のませたる新を記智月
煙入の門をさるるけらくも評六
く川もやももくも橋の上とてや
ゆるやむ一くく僧の後の色今
ささくもくもたむ住居の如今
鷓鴣来はとけくもくも中記如行

狼乃夢世海あり村をれきさ草

赤木濱眺望

嶽くや鳴る海は言りあり史邦
納豆とらとらわやもれ高記大州
も尻の容もさる積一我も小史邦
くくく秋も氷もわくれ如今
冬梅も目もくもさばや鳥れ聲土芳
冬仙の花のさるこれ日く春小智月

文庫

正

しんろをば、穴懸しらの九寸五分史弄
わが懸の寐首ふいてまゝ柄うね 山店
丹波路や河あくまゝしと懸た馬 嵐竹
月花の愚し針立や寒の入く露
まを勢や山伏村の長げく 仙杖
一匁や相場のくハれ事納 嵐竹
所代と籠て志積りうくを史弄
全云事とほくくめで事納 山店

新刊くく文意をばまらん那 芭蕉
真鳥のふき志をばうくを史弄 全
うくうや一糸あくく史を史弄 智月
うくうやうくうく市に師走亦 正秀
蛤懸いりれうくく史弄の書は史弄
うやまや咳気とくく史弄の暮探志
客人のふくく史弄とくく史弄 し州
酢うくく史弄の蜜棋とくく史弄の石州之道

いと急いよれの海きうの夜くらり 史系
餅舂りし小腹をてりり 瘰癧を 今

石臼之讀

しき代

市中一りあて倍發おとす終た均
きおせよん若とくもれうりしとを
終とわらう事たくくし高山竹林
の猛士もりん心くはく寛平華
山の上皇と終よきし一形流をま

夜是とん終よ唯石臼のむし
乃と聖一國師を是とよりて肉牙
と解しりひ法財と志於民家一
まよと麦刈世むじうらうりも叙こ
落らあたしりあうまうく斤時をと
あよとら事一終よまらうりも論
とれん復た心優波梁塞の居の守よ
くまうく彼そくいと道引切の上

女權

九

立也一上や下く物所が家た
カクくく者者のくせんも専りた
好く不割土間よあてて庭より外
とんねを謙し居る事の調へ
終ふのくやうらふも黄姉はあ
うけつうくのみくくはくはく
さく静まりた一目なりくはくはく
くぬとく荷小老孫のつくはくはく

あつくはくはく音すくくくはくはく
李札の劔を採よくはくはくはく
也一名とたむじ盗人のわくはく
やうととたあす盗人のわくはく
うのみふとくはくはくはくはく
とも川はくはくはくはくはくはく
くもくはくはくはくはくはくはく
孫りよりは佛れよのはくはくはく

大蔵

四

かりしおとくを形ふくははるは
撰りてん力り其飢とよく
ふり文王乃始し仕りては終ふ
事さうしは御い中御のしり
未分の御しよりぬりし聲を唱
詠を古代のまゝめい枝をさ
まはる糸も志すは終る志はぬら
しりあはれはあはれりや

札銘

間が於時をひらとよく略正
吹嘘乃糸と御り終るは終る
はまはれ書と叙とあはく聖意賢
文は精神をいりて静りか
記を筆とらりて義載素志方寸小
入るくははれり一物三
用はさうとく高こ八寸かましく二

文庫

上

尺兩脚一の先つ化をぬく川の
卦を彫り一多潜龍牝馬
貞一男ふとどどく一月を
さしやまき二用とんや

真蘭子未元祿仲冬色雀書

對門人僧

是也在志煤小海地古合子

煤掃之説

明はの空より物のほくく
此中終冬を冬とくくを
一もふた師を乃十日煤
もよめぬとけりやと井の
儀式九重れ町志法ハ嘉例
の終事か一唯りくく
人のあはけく解しやう面白

夕暮 夕暮は夕暮に暮てる公
夕暮は夕暮に暮てる公

夕暮は夕暮に暮てる公

夕暮は夕暮に暮てる公

夕暮は夕暮に暮てる公

夕暮は夕暮に暮てる公

夕暮は夕暮に暮てる公

夕暮は夕暮に暮てる公

夕暮は夕暮に暮てる公

夕暮は夕暮に暮てる公

夕暮は夕暮に暮てる公

夕暮は夕暮に暮てる公

夕暮は夕暮に暮てる公

夕暮は夕暮に暮てる公

夕暮は夕暮に暮てる公

夕暮は夕暮に暮てる公

夕暮

夕暮

藤原や黒くのみを化つてと店
馬とらしてえとあつた顔とれ邦
く川原ふ酒毒が出来て死ふと竹
年一子まびきだ董々どれと浩
御薬比のまもとけけ新古歌邦
変くく垢く水風呂れ蓋店
両方へのりりをもて手行燈浩
せよく草のびびく日乃言行

戀人のつげはたふ立て居れ店
又引さいくほりりふり利邦
盆まを戴分少とつとれ小脇括竹
徳まくく京ま月とらつた浩
槿乃のまきさうと踏のり成邦
籠くともだ 雞がとれ店
とどろけの山れ湯はく寒は浩
千日谷乃銀杏をく川竹

久草

治と身と木戸て志う以組屋敷店
追く醫志と呼小やの邦
いらくや星のつほく撞と小竹
野ありそく中れ椿新田店
藪岸小びれに櫻の咲出て
夕日志の節小胡蝶じりる邦

分別の志を記りて良れ暮 はる

小文庫

春之部

年くや猿小はるは猿の回芭蕉

鳩れ海辺よまよとあそび

三日嘴と氷ス

大津繪の業のけりや小佛今

物この机硯箱を翁物くい
りしとあそびる繪と讀

文庫

共

きんねんを浴のなまふいさ
ゆたききんねんを浴のなまふいさ
奥一戸はさうり木曾れ繪巻越
乃菅義一幸杖はさききれ
自畫の像はふかくきりかき
花浴衣我五雨亭小巻居一
多少時一所不住のうきんときふ
下しうきねん師の形り一

たおしくわらき日化し情らこ家
時をききとをききとえりこす
生前のわらきとく白れ味を
うきあつじ月七日にまわり
菜のりひのよとわらき削らる
うきあつじ袖ふりきき
きき

おれあつじ柄のうきや粥のうきと史邦

若菜はきん之浦に大助百六ツ 元 嵐園

一ふきの牡丹はしと若菜の尾頭

根中屋まぐしり 史和

一 洛水に押り 山店

一村と鼓で 史和

いふか 史和

去來子へ 史和

篋は剪れ 史和

寺の名や 木子由

く 魚目

り 史和

鞍馬全銀 史和

じ 史和

白梅や 千川

山崎 史和

志 史和

史和

史和

しるし柳れらうる志びく邦も
池夕浪化みれりや海ふらう
柳の志びくかゝ去来り去諾
くく入集しくふれく常
くく池くく池わらまこま
片わくくくく

春水満四澤れきと

川柳あましくく此葉口山店

も柳の路次くくか鎗つく山嵐作
川ゆて帯くく柳か出水
泥亀くくく柳か可長
青柳くくくやと川之史邦
馬系くくく柳小里倫
ま柳くくく水れ胡蘆去来
くく風くくや白良
草先や追鳥狩れじく史邦

歌集

九

苔清水

凍と雪のくそ水汲干かほり水くそと

ササキ

くろぬのふ下より水来り耶 今

鞍馬

僧正の谷とよむ事以餘を也 野童

黒川の松の枝よりや若縁 出芳

呼出—小舟てけんや猫の妻 去来

鎌倉と別の—か—猫の意 南都

ふくと死とせん—と中は猫の妻 史邦

南都

まかり終やろをかた山の湖は とも

二月堂取水

水とらや氷を僧の水白りや 今

時頃とせんの熟火のふみや隴月 史邦

蛇とくはなれはか片に雛子色 芭蕉

多田志御廟一語

いづれいそはるし神れ報子うね史邦

栖去之辨

良号いほまのまゝやふん

あゝいこいれわうまゝく楯所

りふれらふまゝこりして陸月記

きゝあおねまお風雅とくしや

是くくくくくくくくくくくく

凡風情胸中とくせりくゆま

りくせくや風雅の魔ふりり

るくく放トして栖と去

腰くく百錢とくくくく

柱杖一鉢く命と後ぬり得

きく風情強ふみ強とゆらん

き雀うりとくくくくくく

呂九追悼三寸

と雀好く聲あはれおろるるも 曹覺
物も好くあはれおろるるも 去來
おろるるも 膝づくつとて 臆月 史邦

伊賀新大佛之記

伊賀新大佛之記
伊賀新大佛の庄一 新大仏
おろるるも 膝づくつとて 臆月 史邦
大寺乃む一 後兼と人志旧

跡りりあはれ一 舊里小仏とて
て旧交字七宗無む一 妙く利
とあはれ一 してとあはれよあはれに
王門撞樓のの片枯る草れ
おろるるも 膝づくつとて 臆月 史邦
石居一 してとあはれよあはれに
おろるるも 膝づくつとて 臆月 史邦
おろるるも 膝づくつとて 臆月 史邦
おろるるも 膝づくつとて 臆月 史邦

冬にしも昔れの中をさるるも御仏
ハ志のくかろ岩窟一りもて
霜よ朽苔一り埋もくわのふ
らんさあまふ清く一り
けくもね上人跡御影とわ
く魚さふ草堂のしほく小女
直志く誠さあねの人のかと
はいな上人の貴頼りて傳ふ

りくゆくしと新く海をから
て誇るねくじけ一り石其至一り
ねんま

夫六一陽をさる一石れ上

賀茂一りのねんま

照はる日やらふれ芝のり史邦
志平ねく苗代馬のの中へ山石
千州の田とくはかり難波人一鷺

川渡や流と休すは芦乃角猿雖
物もけり草の産もやうらむ菊口
ころ雨や陣雞のれ臺所 游刀
川鳥の中よゆもや田螺取 支老
咲くは枕の中ころり川橋 とも

三月三日埜の海より桂て二句

胸透して頂よりころり心は汐干ふ史邦
くがけ帆の流路もなれば塩干ふ去來

鹿島より松葉のち汐干ふ山店

とく言へり諸

一日れりはまゝ松のひら史邦

桒易甲山

上代のま月をえきうぬ甲山 今

出替や哀もさう奉加帳 許六

下品の情

のりまやころりともな片じと史邦

下くもる君形しそよあつ龍山店
馬よりや畑の入りり桃柳北靨
梅ははれはそよ春一屋敷も山店
藪一し君て枕ははれか赤椿全

旅行

内庭とんぞけおろる白はり一嵐作
堀起おほはれぬおや穢のより鳥芝
鬘斗目ましく月夜下り葦草山店

雑記

海堂やが八門より必は堂の主人史邦

僧丈草一別

慇懃不成しわらわや菘の陰全
万日れ中屋とそえりり百千鳥嵐作
呼子鳥りく、碓水れ盤根石史邦

西行像讚

とくはそ身ははれぬか人そ

中よりかきゆり日暮

く白

花はく山は日くられ河さげしき

茅野

花はく山は日くられ河さげしき

換りて食にをりり花はく山は日くられ

花はく山は日くられ河さげしき

り道や木のまゝ通る花はく山は日くられ

村中へ咲りり花はく山は日くられ

系譜を花はく山は日くられ河さげしき

ありりや金王櫻は深き川 史邦

穀はく山は日くられ河さげしき

三月盡

赤猫乃く山は日くられ河さげしき

新宿は春の暮 史邦

水風呂は春の暮 史邦

三吟

櫻見ぬ袖ちのりや田舎律

嵐竹

麦の中へはひぬ啼ぶ

史邦

度安山とてしる春を

山店

いしく膳とて

竹

しのむ衣をぬる月の

邦

提志一乃さ

店

^ウ八相れもや

竹

御門徒寺の

邦

龍蟬のい

店

と

竹

若

邦

汁

店

く

竹

か

邦

わも笠を腰よへて丹波道 店
 六 帖一 身と袖のりこゝに 竹
 花のを緑日びり掃とてと 店
 隣 濁る門のく赤土志谷 邦
 二
 玉のでも皿の掛し抱小滝 竹
 寅 背中さへも茶を 店
 暮もく啼齒のりさけは 邦
 山も御柔瓦しも染りのり 竹

本堂を石へも屋に及中 店
 二 海小中へりや抗も好 邦
 十五夜と吹のりさく西の室 竹
 稻こはありし朝ホコラもさ 店
 竹藪の鶴上戸さく終く 邦
 又さくをぬり泣くもさ 竹
 一 けりゆりてさくも 柳 看 店
 八 専のりさく晴れさく 邦

大集

天

庭ぞ松や小母のゝる所竹
返事よれしとて之にわら臺店
梅のひらきもく通に銚之次邦
やまごころかき身町の朔食竹
景のよき山はつゝや花りて邦
帛鶴のゝるわり梅若れ森店
花乃を侍人上野の浅州くも

